

こんなしかり方していませんか？

今年の入学式で、「江戸時代の農政家 二宮尊徳氏の言葉『かわいくば、五つ数えて三つ褒め、二つ叱ってよき人となせ』』という話を紹介しました。これは、叱るより褒めることの方が効果的であるということの例えですが、子供たちにとっての学校がよりよいものになるためには、叱るところ、褒めるところを学校と家庭が共通のものとし、それぞれの役割を十分果たし、お互いに連携し、協力し合うことが大切だと考えています。そこで今回は、しかり方について共通の認識を持てたらと思います。大きく 3 点です。(気をつけているのですが、私たちもよく失敗する例です。)

(1) 他人と比べない。

(2) 目の前で起こった出来事だけを注意する。

(3) 短時間に叱り、なぜ叱られたかを最後に確認する。

もう少し分かりやすく説明すると

(1) 「他人と比べない」、こんな失敗例があります。

「あなたはまだ繰り上がりの足し算もできていないよ。〇〇くんはもう割り算もできるのに」

そんな言い方で他人と比べられると、せっかく練習しようという気持ちがあったとしても、それを悔しさが上回り、聞く耳を持たなくなってしまいます。結果的に大人への反発心だけが残るので、自分のしたことや不足していることに向き合えなくなります。

(2) 「目の前で起こった出来事だけを注意する」、こんな失敗例があります。

「どうして片付けが終わっていないの。昨日も片付けが遅かったし、前には××の忘れ物もしていたでしょ」

大人は子供を注意しているうちに以前のことを思い出し、合わせて問い詰めていくことが多いです。しかしそれでは、注意の効果は激減します。子供は「ただ注意された」という事実だけが記憶に残り、反省しているそぶりを見せても、その場が過ぎ去るのを待つようになります。

(3) 「短時間に叱り、なぜ叱られたかを最後に子供に確認する」、こんな失敗例があります。

「何が悪かったのか、わかったかな？ わからない？」

同じような過ちを繰り返す子の場合、大人が注意していることをきちんと理解できていない可能性があります。長く叱ったわりには、何が悪いのか理解できていないことがあります。授業の準備を全然していない子にひと通り叱ったあと、何が悪かったのかを聞くと「どうして先生はそんなに怒っているの？」と答えることがあります。

結局、短時間に簡潔に叱って、その後、少し優しく聞いてあげることです。「何が悪かったのか、次にどうすればいいかを教えて」、そして少しずれているなどと思ったらその場で正して、復唱させる。なかなか出来ないものですが、感情的にならず、冷静に叱りたいものです。

校長 土井 安博